

## 石橋泰幸さんと九州派

山内重太郎

1957年、九州派が結成されてから本年度で既に42年、その一応の終熄とされる、1962年の「英雄たちの大集会」から数えても、37年が経っている。

前衛美術不在の九州にあって、最初の前衛美術運動を展開した九州派については、その全貌が必ずしも明らかにされているとは言い難いにもかかわらず、事実と遊離して、伝説化されつつある様に見うけられる。

一握りの作家だけが九州派と考えている人たちがいるかと思えば、嘗つて九州派に所属していたというだけで、その作家がどのような活動をしていたか、また作品を作っていたかということには無批判に、過大に評価している向きもあるが、何れも誤りであろう。

九州派解体以後、個々のメンバーの生き方や作品の追跡調査等も充分に行われているとは言えない。勿論、九州派以後、作家活動を断念しているメンバーもいるが、今日でも尚、九州派精神というべきものを堅持して、世評にとらわれず、制作活動を続けている人たちがいる。しかし、何れも、老境にあるか、老境にさしかかっている。

太陽は光と影を作るが、世評も亦、光と影を作る。光が当たっているからと言って、その作家が優れているとは言えないと同じく、光が当たっていないからと言って、優れていないとは言えないのは、自明の理であろう。

石橋泰幸さんは、私には、後者に思える。私は、泰幸さんの九州派以前の作品については、殆ど知る所はないが、九州派時代、彼のダダ的冒険というべき、実験的作品は、幾人かの作家のものとともに九州派の作品をリードしてきたと私には見える。九州派時代もそれ以後も、泰幸さんほど実験的作品を作り続けてきた九州派の作家はいない。しかも、彼の多岐に亘る実験的作品は、単なる思いつきなどではなく、確かな技術と強い自身に裏付けられたものである。

私は、1962年5月から63年5月までパリにいた。その時期は、ダダイスム、シュールレアリスムの回顧展が屢々開かれており、フランスのネオダダである、ヌーボーレアリスムの全盛時代であったが、なぜか、泰幸さんの作品が頻りに思い出された。

私は何の縁であろうか、泰幸さんとは、九州派解体以後、1994年の最後の日韓現代絵画展まで、九州派のメンバーとして唯一、各種のグループ展では、殆ど行を共にしてきた。その都度出品されたものは全て、実験作品と言ってよいであろう。作品歴を見て貰えば分かることである。

泰幸さんは、会えばいつも、次の実験作品について語る。嘗つて九州派時代、当時、独立展の会友であった、今は亡き熊代駿氏が私に言われたことを思い出した。作品の冒険、実験にあけてくれた九州派の中でも、特に目立った、泰幸作品を念頭に置いてのことだ

ったと思うが、実験、実験で一生経ってしまうのではないかとの老婆心からの言葉である。私はその時、それで良いと思ったのか、反論はしなかった。

泰幸さんにとって、マンネリズムは、死にも等しいものではなかろうか。この何年間か、泰幸さんは物心両面に亘る苦境のなかでありながらなお、作品の実験への熱意は止まることを知らない。

私は、この「実験精神の鬼」に、心から声援を送りたい。